



## 伯耆大山の急斜面ガレ場におけるヒバリの生息状況

上田恵介\*

〒171-3501 豊島区西池袋 3-34-1 立教大学

### はじめに

ヒバリ(亜種ヒバリ) *Alauda arvensis japonica* は、日本国内では九州から北海道までの低地に広く繁殖分布し、原野や農耕地、埋め立て地、河川敷などに夏鳥または留鳥として普通に生息するとされてきた(山階 1933–4, 羽田・小淵 1967, 黒田 1982, Brazil 1991, 日本鳥学会 2012)。しかし近年、ヒバリが北海道、本州、九州の火山のスコリア帯や、北海道、本州の山岳地帯の亜高山帯から高山帯のガレ場に生息していることが明らかになってきた(上田ほか 2017, Ito *et al.* 2020)。

しかし本州の近畿～中国地方には活動中の火山が存在しないのでスコリア帯を持つ山がないこと、また山の標高が相対的に低く、多くの山では山頂直下まで森林が迫っており、急峻な岩峰は存在するものの、ヒバリが棲めるような見通しの利く広い緩斜面がないことから、ヒバリは生息しないと思われていた(上田ほか 2017)。

著者は 2017 年の夏に伯耆大山に登頂した折に、弥山(1,709 m)の山頂付近に広がる天然記念物のキャラボク *Taxus cuspidata* var. *nana* 純林の下、標高 1,600 m あたりの地点で 1 羽のヒバリが囀っているのを目撃した。そこで改めて 2018 年と 2020 年にヒバリの生息状況を確認するため、同地に赴き、これまで報告されているヒバリの生息環境とは異なる環境でのヒバリの生息を確認したのでここに報告する。

2021 年 8 月 22 日受理

キーワード: ヒバリ, 急斜面, ガレ場, 繁殖集団, 亜高山

\*: keisuke@rikkyo.ac.jp

### 調査地と方法

最高地点の標高 1,729 m の伯耆大山(35° 22' 16"N, 133° 22' 24"E)は現在では活火山とはされていないが、約 2 万年前に噴火で形成された成層火山である。登山道のある弥山の山頂直下には避難小屋があり、その周囲にみられるわずかの裸地とヒゲノガリヤス *Calamagrostis longiseta* の風衝草原は、夏には多くの登山者で往来するため、ヒバリが生息できるような環境ではない。頂上西側の緩やかな斜面には特別天然記念物のキャラボクの密な純林が広がっている。

キャラボク林が途切れる 1,600 m あたりの登山道の下は、過去に大規模な崩落を起こした大ノ沢と呼ばれる急斜面で、標高 900 m あたりまで、標高差 700 m の急峻なガレ場となっている。この斜面は小さな岩屑が幾重にも積み重なった崩れやすい斜面である。大ノ沢には登山道はあるが、現在はほとんど利用する登山者はなく、かすかに踏み跡が残っている程度である。また弥山の南側斜面には、大ノ沢に隣接して、一ノ沢、二ノ沢、三ノ沢と、大ノ沢同様の急傾斜の崩壊斜面が並んで存在する(図 1)。

ガレ場の風の当たらない部分は矮性化したミネヤナギ *Salix reinii* が覆っているが、風が当たる側の斜面にはツガザクラ *Phyllodoce nipponica*、ネバリノギラン *Aletris foliate*、イワカガミ *Schizocodon soldanelloides*、オオバギボウシ *Hosta sieboldiana* などの多様な高山植物とコケ類、地衣類がモザイク状に群落を形成して



図1. 伯耆大山のヒバリの生息環境  
(大の沢). 2020年6月26日,  
著者撮影.

Fig. 1. The steep slope of Mt. Hoki-  
Daisen.

いた.

2017年5月21日, 2018年6月25日、  
2020年6月26日に早朝から弥山に登山し、  
登山道の下斜面(大ノ沢)において、ヒバリの  
観察調査を行った。調査地およびその周辺  
の斜面の傾斜を表す斜度の計算には、国土地理  
院の地形図を用いた。ヒバリのいた大ノ沢の標  
高1600m付近から1300mくらいまでの斜面  
からランダムに10地点を選び、地形図の標高  
50mごとの等高線間の距離 $d$ を地図上でノ  
ギスを用いて測定し、

$$\tan \theta = 50/d$$

の計算値から、三角関数表を用いて斜度にあ  
たる角度 $\theta$ を読み取った。

#### 観察結果

最初に弥山の登山道からヒバリの飛翔さえ  
ずりを目撃したのは2017年5月21日であっ  
た(図2, ▲印)。その後、2018年6月25日  
と2020年6月26日に早朝から弥山に登山し、  
2017年にヒバリを目撃した登山道の下斜面  
(大ノ沢)において、ヒバリの観察調査を行った。

このガレ場において、2018年には少なくと

も4羽の雄が囀っているのを確認した(図2,  
●印)。巣は見つからなかったが、そのうちの  
1羽がつがいのメスらしい個体を追尾してい  
た。2020年は時期が少し遅かったのと、風が  
非常に強かったせいか、囀っているオスの数は  
少なく、飛び上がらずに、地上でさえずりを行  
う姿もよくみられた(図3)。この時は2羽の  
オスがさえずっているのを確認しただけであ  
ったが(図2, ◎印)、この2羽の間での地上付  
近での追いかけ合いを観察することができた。  
またこの2羽以外に、ビュルッと言う地鳴きだ  
けを発して、斜面に沿って低く飛翔するメスら  
しい個体を観察した。

ヒバリを目撃したのは大ノ沢の標高1,300m  
から1,600mの標高差約300mの間の斜面で  
あった。この区間の斜面の平均斜度は $35.0 \pm 2.7^\circ$  ( $x \pm SD$ ,  $N = 10$ )で、最大斜度は  
 $39^\circ$ に達していた。同様の計算方法で、一ノ沢、  
二ノ沢、三ノ沢の斜度も計算したところ、一ノ  
沢の平均斜度は $35.4 \pm 3.0^\circ$  ( $x \pm SD$ ,  $N = 10$ )、二ノ沢の平均斜度は $30.1 \pm 3.5^\circ$  ( $x \pm SD$ ,  $N = 10$ )、三ノ沢の平均斜度は $29.5 \pm 3.3^\circ$  ( $x \pm SD$ ,  $N = 10$ )と、どの沢も



図 2. ヒバリの観察地点。電子地形図 25000（国土地理院）を加工して作成。

Fig. 2. Map of the study site. Dark dots indicate the points where skylarks were observed.



図 3. 斜面の地上で囀っているヒバリ。

Fig. 3. A male skylark singing on the ground.

大ノ沢とほぼ同様の急斜面であることがわかった。

#### 考察

鳥取県の鳥類相に関してまとめられた「鳥取県の野鳥」（鳥取県農林部造林課 1972）、「大山隠岐国立公園 大山地区学術調査報告」（日本自然保護協会 1973）、「鳥取県鳥類目録」（日本野鳥の会鳥取県支部 2014）には伯耆大山の山頂部におけるヒバリの記載は見当たらなかった。さらに戦前に伯耆大山の鳥を調べた靱山・

松井 (1939) は、弥山山頂部のキャラボク林周辺の鳥をリストアップしているが、その一覧にはヒバリは出ていない。今回の発見は伯耆大山の高所におけるヒバリの生息の初記録だと思われる。

これまで伯耆大山でヒバリに関する記録がないのは、ヒバリが生息していなかったわけではなく、今回発見したヒバリの生息地が一般登山道から外れた大ノ沢の急斜面で、これまでの調査の手が届いていなかったことによると思われる。また弥山の山頂直下のキャラボク林とその

周囲にはビンズイが生息しているので、遠くで鳴いているヒバリの声がビンズイのさえざりと混同されていた可能性も考えられる。

この2回の調査では、巢の発見につとめたが、メスの姿は確認できたものの、巢の発見には至らなかった。理由は、斜面が急すぎて、歩くだけで岩屑が崩れるので、トレイル外へ踏み出すことは極力避けたことによる。また巢の周りを踏み荒らすことによるヒバリの繁殖への影響も考え、これ以上の探索はおこなわなかった。

これまでに報告されたヒバリが生息する山岳地帯の斜面の傾斜は、たとえば富士山須走5合目なら斜度は16～17°、樽前山では20.8°、浅間山の少し急な斜面では23～24°と、どこも比較的なだらかなスコリア斜面であった。それゆえ著者は当初、このような斜度が35°にもなるような急斜面のガレ場にヒバリが生息しているとは予想していなかった。しかし2018年にはつがいでいる様子を観察できたことから、この斜面でヒバリが繁殖している可能性が高いと思われた。また登山道がないため今回は調査できなかったが、弥山の南側にある大ノ沢同様の急傾斜の崩壊斜面、一ノ沢、二ノ沢、三ノ沢にもヒバリは生息しているものと思われる。

ヒバリがこのような急斜面にも生息できることが明らかになったことは、今後、山岳地帯でのヒバリの生息の可能性を広げるものであると考える。

#### 謝辞

当該地域への入山許可をいただいた鳥取森林管理署、大山町教育委員会の松田剛氏、文献探索でお世話になった日本野鳥の会の原元奈津子氏、山階鳥類研究所の小林さやか氏に厚くお礼を申し上げる。

#### 引用文献

Brazil, M. A. 1991. The Birds of Japan. p.466. Helm,

London.

羽田健三・小淵順子. 1967. ヒバリの生活史に関する研究.1. 繁殖生活. 山階鳥研報5: 72-84.

Ito, Y., Matsui, S., Shiraki, S. & Ueda, K. 2020. Habitat selection of Skylarks during the breeding season on the volcanic slope of Mt. Tarumae. Ornithol. Sci. 19:167-175.

黒田長久. 1982. 鳥類生態学. p.614. 出版科学総合研究所, 東京.

籾山徳太郎・松井義範. 1939. 伯耆大山並に附近の鳥類. pp.833-876. 吉田博士祝賀記念会誌.

日本自然保護協会. 1973. 大山隠岐国立公園: 大山地学術調査報告. p.182頁. 東京.

日本野鳥の会鳥取県支部. 2014. 鳥取県鳥類目録. p.59. 鳥取.

鳥取県農林部造林課. 1972. 鳥取県の野鳥. p.102. 鳥取.

上田恵介・三王達也・佐藤望・上沖正欣・三上修. 2017. 火山斜面や山岳地帯のガレ場に生息するヒバリの繁殖集団について. Strix 33: 211-219.

山階芳麿. 1933-4. 日本の鳥類と其生態(第一巻). p. 524. 梓書房, 東京.

An alpine population of the Skylark *Alauda arvensis japonica* on a steep slope of Mt. Hoki-Daisen

Keisuke Ueda\*

Rikkyo University, 3-34-1 Nishi-ikebukuro, Toshima, Tokyo 171-8501

I found a breeding population of Skylarks on Mt. Hoki-Daisen (1709m asl), southwestern Japan. At least four skylarks were singing and defending the territory in May and June on the mountainside. The slope is extremely steep at about 35 degrees on average. The elevation of the skylarks' habitat was around 1300 to 1600 m. Although I observed a pair of Skylarks, I did not find any nests.

*Keywords: Skylark, alpine slope, breeding, Western Honshu.*

\*: Present address: 2-12-18 Hatogaoka, Hatoyama-machi, Hiki-gun Saitama, Japan